

『ブリハット・カーロッタラ』におけるガウリー儀礼について ——マントラを中心に——

篠 田 淳 子

1. 『ブリハット・カーロッタラ』のガウリー儀礼章

筆者はシヴァ教のカーロッタラ文献群に属する『ブリハット・カーロッタラ』について三本の写本に基づいた校訂研究をすすめている（篠田 2012, 2013）。現存するカーロッタラ文献群の中で、唯一『ブリハット・カーロッタラ』が、部分的にはカシミール・シヴァ派などシッダーンタ派以外の教説も取り込んだ折衷主義のテキストであることが、A. Sanderson 教授らによって指摘されている（Sanderson 2001, 2006）。『ブリハット・カーロッタラ』の後代への影響としては、『アグニ・プラーナ』に注目できる。『アグニ・プラーナ』はしばしば『ブリハット・カーロッタラ』の章を借用している。筆者のこれまでの比較研究では、とりわけ、マントラの特別な形に関する箇所が取り込まれる傾向にあり、『ブリハット・カーロッタラ』でマントラの形が記されなくても、『アグニ・プラーナ』では、はっきりと記されるときがある。本稿では、ガウリー儀礼章のマントラ作成に注目し、『ブリハット・カーロッタラ』のマントラ抽出の性格を考察する手がかりにしたい。ガウリー儀礼章は『アグニ・プラーナ』326 章で部分的に借用されており、マントラの形も記されている。D. Goodall 博士（*Tāntrikābhidhānaśāstra*, vol. II, p. 204）によると、ガウリー女神はシヴァ・プージャーにおいてガネーシャ神の取り巻きの一人として出てくるが、それを除けば十世紀以前のシッダーンタ派において突出してはいない。ガウリー儀礼らしきものが出てくる箇所として、Mrg kpなどを博士は指摘され、「女性に（女性のための）幸運（saubhāgya）を与えることから、ガウリー儀礼は女性が実践するための儀礼である」と説明される¹⁾。挙げられたテキストの箇所では儀礼の詳細の説明はされていないが、本稿でとりあげる『ブリハット・カーロッタラ』では、用いられるマントラ、瞑想、マンダラ、ムドラー、成就法の五要素について詳しい手順が説明されている²⁾。『ブリハット・カーロッタラ』で対象となるのは、超能力（bhūti）を望む人たちであり、ガウリー

(236) 『ブリハット・カーロッタラ』におけるガウリー儀礼について (篠 田)

儀礼を行うことで、長寿や繁栄、比類のない幸運——とりわけ女性の幸運³⁾——や息子が与えられ、本儀礼は他に並ぶものがないものであると述べられる⁴⁾。女性の幸運や息子が授かるという果報から、本儀礼が女性にとって有益な性質を備えていることが確認される。このガウリー儀礼は「入門儀礼を受けた者以外に与えられるべきではなく、信愛者以外には決して〔与えられるべきではない〕」ものである⁵⁾。

2. ガウリー儀礼章のマントラ

本章にはガウリー・マントラ、シヴァ・マントラ、エーカヴィーラ・マントラの三種類のマントラが出てくる。マントラ抽出の手順にしたがって、それらの形を得ることが求められるが、三種類ともに正式な形は記されない。利便性をはかったためか、写本のうち二本が欄外に推測される文字を記している。

ガウリー・マントラ マントラは以下の神格によってあらわされる文字により構成される⁶⁾。まず、citrahānu (欄外によれば ra 字), Śiva (欄外によれば ha 字), kāla (欄外によれば bindu), そしてマハー・シャクティによって伴われたもの (欄外によれば i 字) をつなげ、hrīm⁷⁾ が得られる。ūhaka に先行するもの (u 字)⁸⁾ を sad (欄外によれば sa 字) の後に抽出し、avikārin (写本一本が欄外に bindu と記しており、もう一本には記載がない) とつなげて saum あるいは sa um が得られる⁹⁾。このようにして得られた hrīm と saum の二種に tāra (欄外によれば om), gaurī の与格, namaḥ が加わる。マントラ全体は八文字 (vasu-ṛṇa)¹⁰⁾ からなる。以上を考えると、hrīm sa um om gauryai namaḥ が想定される。『アグニ・プラーナ』326 章では、マントラの形が om hrīm saḥ śau gauryai namaḥ と明示される。八文字からなるわかりやすい形だが、om の置かれる場所や saḥ śau がどこから得られたのかは不明であり、抽出手順にそってこの形を得たのではない可能性もある。この形に加えてガウリー・マントラには、六つのジャーティ¹¹⁾ を備えたアング・マントラ¹²⁾ と、イーシュヴァラにはじまりシャクティに終わるムールティ・マントラが含まれる。

シヴァ・マントラ ガウリー・マントラでは、写本の欄外に文字が示唆されていたが、シヴァ・マントラ以降には記載がない。シヴァ・マントラは ūhaka によってあらわされる ū 字, kalā のあらわす文字, シヴァの種字によって構成される¹³⁾。シヴァの種字を ha 音と考え、kalā はビンドゥと考えると hūm のような形が想定される。これに加え、母音をともなったアング・マントラが六通りに唱えられ、その後、フリダヤ・マントラを用いてニアーサ¹⁴⁾ がなされる。ガウリー・マン

『ブリハット・カーロッタラ』におけるガウリー儀礼について（篠 田） (237)

トラとシヴァ・マントラの対がヤーマラ（一対）と呼ばれる。

3. 『ブリハット・カーロッタラ』のマントラ抽出

神格名に文字を対応させるのは、マントラ抽出でよくみられる手法であり、『ブリハット・カーロッタラ』の第2章にあたるプラサーダ章で śabda rāsi（音の全体）と呼ばれる字母表が開示されている。テキストのはじめのほうに字母表が置かれていることから、テキストの後ろのほうの章においても、マントラ抽出はこの規則にしたがって為されるのではないかと考えられそうなものだが、ガウリー儀礼章は ū = ūhaka など一部の例外を除き、この字母表の規則には従っていない。『ブリハット・カーロッタラ』は百科全書的性格を備えており、マントラの抽出に限っても章ごとに異なる法則性がみられる。マントラ抽出は入信者以外にはわかりにくいように謎解きのような難しい形で記されるが、テキスト内でマントラ解説のための一貫した共通の法則が少ないことが、マントラの正確な形を明らかにするのを困難にしている。さらに、篠田（2013）でも検討したように、同じ名前のマントラでも複数の形や長い形と短い形の両方がある場合もあり、マントラそのものや抽出手順に多様性をもたせるための工夫がされている。だが、そのためにマントラを得る手順がより複雑になっており、『アグニ・プラーナ』はその点を考慮したためか、『ブリハット・カーロッタラ』のマントラ章を借用するとき、ガウリー・マントラに限らず、正式な形と想定される形を記す傾向にある。

1) “Gaurī appears in the āvaraṇa of the ganeśas in the śivapūjā, but is not otherwise prominent in the demonstrably pre-tenth-century Siddhāntas. A gaurīyāga is alluded to in Mṛg kp 8.33 and a simple procedure for the gaurīyāga is taught in Kir38. It is implied at the end of the preceeding chapter (Kir 27.29) that the worship is taught for women to practice, for it is there qualified as strīṣu saubhāgyadāyakaḥ (‘bestowing good fortune upon women’).” (p. 204) 2) gaurīyāga

3. mantrādhyānam maṇḍalam ca mudrā sādhanam eva ca. pañcaprakāram saṃkṣepāt kalpaṃ te kathayāmy aham.

3) saubhāgya はシヴァ教儀礼において、主として女性の幸運を意味することを Diwakar Acharya 博士に伺った。

4) gaurīyāga 2. bhūtikāmaiḥ sadā sev-yam āyupustivivardhanam. sarvasaubhāgyam atulaṃ śrīmedhākāntiputradam.

5) Gaurīyāga の最後の部分では、以下のようにある。idaṃ gaurīvidhānam tu kathitaṃ te samāsataḥ. nādī-kṣīteṣu dātavyaṃ nābhakteṣu kathamcana.

6) gaurīyāga 4-7b. citrabhānum śivaṃ kālāṃ mahāśaktisamanvitam. ūhādyam paratoddhṛtya sad evam avikāriṇam. dvitayam tārakākṛāntam gaurīnatipadānvitam. caturthyantam prakartavyam gauryā vasvarṇavācakaṃ. tatrādyatritayenaiva

(238) 『ブリハット・カーロッタラ』におけるガウリー儀礼について (篠 田)

jātiyuktāṅgaṣaṭkakaṁ. āsanam prāṇavenaiva śoḍhāvidyāntam uccaret. īśvarāc chaktiparyantam mūrṭiḥ svahrdayena tu. 7) 順序通りには rhim だが, cihna (印, 特徴) を cinha と発音するような事例を考えて, 発音上では hrīm となると想定した. 8) ūhādyā を ūha に先行するもの (u 字) と読むか, ūha に始まるもの (ū 字) と読むかで得られる母音が違うが, ここではこのように解釈した. 9) a 字に u 字をつなげると o 字が得られるはずであるが, 後述するように八文字になるように調整するには, こうではないかと考えた. 10) インドラが率いる神々のグループとして Vasu は八を意味する. 11) namaḥ, svāhā, vaṣat, huṁ, phaṭ, vaṣat であり, 順に心臓, 頭, シカー, 具足, 武器, 目に対応する. 12) 一般的な形は, om hrdayāya namaḥ, om śirase svāhā といった形であり, om とアングの間に文字が挟まれることもある. 13) gauriyāga 7c-10b. gauri-mantram samākhyātaṁ śivamantram athocyate. ūhakaṁ ca tathākālaṁ śivabijam samuccaret. prāṇam dirghasvarākṛāntaṣaḍaṅgam jātisaṁyutam. āsanam prāṇavenātra ṣaḍucchantu ṣakṛt nyaset. mūrṭinyāsaṁ hr̥dā cātra dhūpadīpādikaṁ tathā. yāmalaṁ kathitaṁ vatsa ekavīram ataḥ śṛṇu. 14) 引田 (2007: 24); 布置は力のある音や音節を身体に据え置く儀礼であり, 手印とマントラとを伴う.

〈略号および使用テキスト・参考文献〉

AP: *Agnimahāpurāṇam*. 2 vols. Ed., rev., and trans. M. N. Dutt. Delhi: Parimal Publications, 2001.
 BK: *Brhatkālottara*. National Archives, Kathumandu, Ms 4-131 = NGMPP Reel No. A43/1 (N1).
 Ms 5-7781 = NGMPP Reel No. A42/8 (N2). Ms pra 89 = NGMPP Reel No. B24/59 (N3). Mrg
 kp: *Mṛgendrāgama kriyāpāda et caryāpāda avec le commentaire de Bhaṭṭa Nārāyaṇakaṇṭha*. Ed.
 N. R. Bhatta. Pondichéry: Institut français d'Indologie, 1962. *Tāntrikābhidhānakośa*. Vol. II.
 Hélène Brunner, Georg Oberhammer, and André Padoux. Wien: Verlag der Österreichischen
 Akademie der Wissenschaften, 2004. Sanderson (2001): Alexis Sanderson. "History through
 Textual Criticism in the Study of Śaivism, the Pāñcarātra and the Buddhist Yoginītantras." In *Les
 Sources et le temps, Sources and Time: A Colloquium, Pondicherry, 11-13 January 1997*, ed.
 François Grimal, pp. 1-47. Publications du Département d'Indologie 91. Pondicherry: Institut
 Français de Pondichéry / École Française d'Extrême-Orient, 2001. Sanderson (2006): Alexis
 Sanderson. "The Lākulas: New Evidence of a System Intermediate between Pāñcārthika
 Pāśupatism and Āgamic Śaivism." Ramalinga Reddy Memorial Lectures, 1997. *The Indian
 Philosophical Annual* 24, pp. 143-217. 篠田 (2012): 篠田淳子「『ニシュヴァーサ』および
 『カーロッタラ』文献群における Śiva-bheda-aṣṭaka について」『印度学仏教学研究』61-2,
 pp. 249-252. 篠田 (2013): 篠田淳子「『ブリハット・カーロッタラ』におけるパーシュ
 パタ・アストラ」『印度学仏教学研究』62-1, pp. 252-255. 引田 (1997): 引田弘道『ヒ
 ンドゥータントリズムの研究』山喜房佛書林.

〈キーワード〉 シヴァ教, 『ブリハット・カーロッタラ』, マントラ, ガウリー儀礼
 (京都大学大学院)